実態報告

今、子供にとって先生とは

静岡大学 助教授
馬居 政幸

一　子供たちとの対話

夏休みのある日、私は夕食のあと本稿の取材を兼ねて、わが家の四人の子供たちにインタビューを試みた。

「先生のことどう思う」(私)

「だーいすき、でも、お母さんもだいすきだよ」(次女の貴子＝小二)

「きらいなことはないけど……こわいよ……でもすきだよ。先生、おこるときは、どちらかといえばお父さんと似ている。」(次男の光二＝小四)

「一番いやだったのは」(私)

「先生にみすてられたとき……授業中騒いでいて、先生がなにもしゃべってくれなくなった……」(次男)

「六年間振り返ってどうだ」(私)

「一、二年の時は優しいんだけど……、でも最初のころは幼稚園と比べてこわかった。三、四年のときは学年で一番こわい先生だったけど……優子はあまりこわくなかったの……。それから五年のときは、とにかくやさしいんだけど……すきなんだけど、やさしくて大好きなんだけど、優子にはあわないんです。あの先生は、一、二年にあってる。六年の先生は、おもしろくていいんじゃない。ときどきものすごい声でおこるけど、しょっちゅうおこるわけでないし」(長女の優子＝小六)

「じゃー、先生がおこったとき、クラスのみんなどう感じる」(私)

「オー、ついにおこった」(長女)

「みんな知ってるんだ」(私)

「そうよ……でも、一回おこるとあといわないからいいの。こわくていやだな、という子もいるけどね……すぐ根に持つ先生はきらい」(長女)

「優子、三、四年のときはこわい先生だったっていったけど、クラスの中で先生をきらいな人いた?」(私)

「そうね……発表しない子っていじゃん。ウジウジしていえない子……こわいっていってたよ」(長女)

「聖一、おまえ、聞いていてどう思う……、小学校時代……」(私)

「すきだけどこわいか、まあ、そんなとこかな」(長男の聖一＝高一)

「じゃ、高校生にとって先生ってなんだ」(私)

「……そうだな……ただ勉強、教えてくれるだけの人かな」(長男)

「アッソウ……じゃ先生にむかつくときってどんなときだ」(私)

「うるさいとき」(長男)

「どういうときだ」(私)

「ウーン……、弁当くってるときに出歩いて怒鳴られた」(長男)

「それはお前が悪いだろう」(私)

「そりゃそうだけど、怒鳴ることはないだろう」(長男)

「先生とは話しするのか」(私)

「話しかけてきたら話すけど……、部活の先生は別だけどね」(長男)

「小、中、高と先生とつきあってきて一番変わったことは」(私)

「先生にも間違いがあるということがわかったこと」(長男)

「それはいつごろからだ」(私)

「ウーン……よくわからんな……いつのまにかかな!……!」(長男)

二　好きか、怖いか、相性か

わが家の小学生三人の先生への評価はかなり良いようである。

先生が大好きな次女は家庭では末っ子の甘えん坊。だが上三人を見て育ったためか、授業内容のほとんどは予習ずみ。この点では次男の光二も同様。家では上二人にいじめられても学校へいけば元気一杯。次男次女とも先生の片腕のつもりでガンバッテいる。

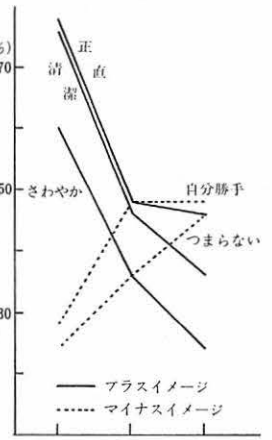
次女が母親を、次男が父親をモデルにしている点では異なるが、ともに親に勝るとも劣らない親近感(信頼感)を担任に抱いているようである。

他方、六年生の長女はかなり覚めているようである。小二の次女の評価基準は〝好き〟か〝嫌い〟か。小四の次男はそれに〝怖い〟が加わる。だが、小六の長女は自分との〝相性〟が問題である。おまけに先生が怒ることも見通して対処しているようす。クラスの仲間を見る目も微妙かつ厳しい。

ただし、担任の先生の長女への評価は「やさしくていいのだけど、もう少し元気にね」。いつも家庭で下二人をどなりつける長女を見ている妻は、この担任の評価に何と答えてよいかとまどっている。どうも家の中ではイバル姉、学校ではブリッコお嬢さんを演ずる二人の長女がいるようである。

他方、「ただ勉強、教えてくれるだけの人」、「話しかけてきたら話す」とあえて無視しようとする高一の長男にとって、先生は自分の前に立ちふさがる壁のようなものではないか。この点で、私は父親である自分の姿を長男の教師像に重ねてしまった。

図1　教師のイメージ



ただ、小学生の妹や弟と決定的に異なるのは「先生にも間違いがある」という教師観。〝好き・嫌い〟、〝怖い・優しい〟、〝相性〟、いずれも先生は〝教える師〟であった。だが長男にとっては、勉強を〝教える人〟であっても〝師〟ではない。単なる〝人〟である以上、あえて話しかける必要もない。直接迷惑をかけるわけでもないのにちょっと歩いたぐらいで怒鳴られる理由もないわけである。

もっとも、以上はあくまで私と子供たちの間で交わされた内容。この教師観が例外かどうか。より一般的な調査データにより確認してみたい。

三　子供の成長と教師観の変化

図1は、大阪、京都、兵庫に在住する小・中・高校生計二四二二人を対象に行った現代っ子の対教師感情に関する調査からとったものである（鈎治雄「現代っ子にみる教師像」『青少年問題』第39巻第4号　平成五年四月号　財団法人青少年問題研究会）。

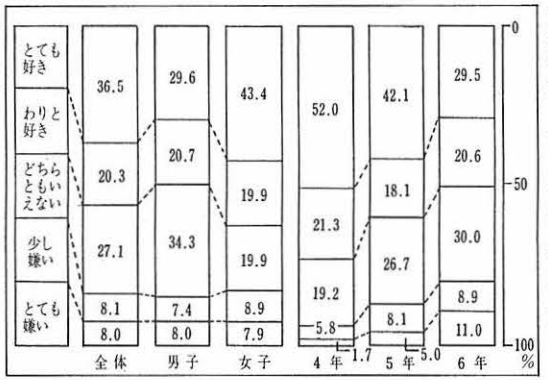
「正直」「清潔」「さわやか」という教師のプラスイメージに対する肯定率（「大変そう思う」＋「まあそう思う」）が、小六から中三、高三へと学年が進むにつれて低下していることが理解されよう。逆に、「自分かって」「つまらない」というマイナスイメージへの肯定率は、学年が進むにつれて高くなっている。

〝すきだけどこわい師〟から〝間違いがあるただの人〟へという私の長男の教師との付き合い方は、どうも例外ではなかったようだ。

三人の小学生はどうか。図2をみていただきたい。これは子供研究者の深谷昌志氏が、数年間かけて収集した百近い学級のデータに基づき作成した表である。（深谷昌志『「子ども」をどれだけ知っているか』明治図書）

「とても好き」＋「わりと好き」をみると、小四は七三・三%、小五は六〇・

図2　担任の教師が好きか－好きが6割弱－



二%、小六は五〇・一%。やはり減少している。他方、「少し嫌い」＋「とても嫌い」は、小四が七・五%、小五が一三・一%、小六が一九・九%と増加している。だが最も担任を「嫌い」な子供が多い六年生でも五人に一人、逆に二人に一人が「好き」と答えている。むしろ、「どちらともいえない」が、小四は一九・二%、小五は二六・七%、小六は三〇・〇%、と増加していることの方が興味深い。

図3　子供のころの自分たちと比較した現在の子供たち　数字は%

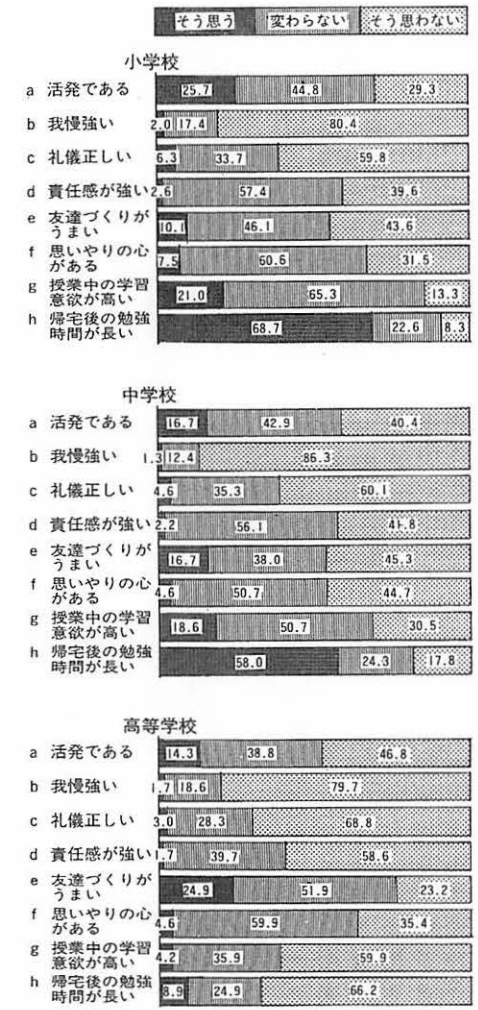


表1　子供のころの自分たちと比較した現在の子供たち

	小学校	中学校	高等学校
活発である	△	△	●
我慢強い	●	●	●
礼儀正しい	●	●	●
責任感が強い	△	△	●
友達づくりがうまい	△	●	△
思いやりの心がある	△	△	△
授業中の学習意欲が高い	△	△	●
帰宅後の勉強時間が長い	○	○	●

(注) ○：「そう思う」の割合が最も大きい
△：「変わらない」の割合が最も大きい
●：「そう思わない」の割合が最も大きい

どうやら私の四人の子供の教師への評価は、それほど平均とはズレていないといえよう。では、このように小→中→高と進むにつれ、〝好き→怖い→相性→ただの人〟と変化する子供たちの教師観をどのように考えるか。

あくまで好かれることを望むべきなのか。あるいは〝人〟ではなく〝師〟であることを求めるべきか。こ

の問いを解くヒントとして、今度は教師自身の子供観をみてみたい。

四　教師の子供観の変化

平成三年度と四年度に、私は静岡県内の教職経験五年目と十年目の先生方一一六五名に対する調査研究に参加する機会を得た。（静岡県立教育研修所教職研修部「青年教師の〝教育に関する意識〟の調査研究―教職経験者（5年）（10年）研修の参加者を対象として―」『教育研究』第八〇号　一九九三年五月　静岡県立教育研修所）

図3と表1は、自分たちの子供のころと比較して、現在の子供たちをどのように評価するかを聞いた結果とその特性を示したものである。

小学校教師で「そう思う」割合が最大の項目は、「帰宅後の勉強時間が長い」、約七割が肯定している。逆に、「そう思わない」の最大は、「我慢強い」と「礼儀正しい」。あとの「活発である」「責任感が強い」「友達づくりがうまい」「思いやりの心がある」「授業中の学習意欲が高い」については「変わらない」が最も大きい。

小学校の教師は、自分の子供時代に比較して、現在の子供は我慢強さや礼儀正しさに欠けるが、全体としてはそれほど変わるわけではなく、ただ、家庭での勉強時間だけはかなり増加しているとみているようだ。

中学校教師の場合は、「我慢強さ」と「礼儀正しさ」に加えて「友達づくりのうまさ」に欠けるが、基本的には小学校教師と同様にそれほど自分たちの頃と変わっていないと見ている。

だが高校教師の目はかなり厳しい。「友達づくり」「思いやりの心」を除き、全て悪くなっていると見ている。

教職研修部は次のように考察する。

「高校進学率が九六%を超え、生徒たちの能力・適性、進路、興味・関心

図4　学習指導における悩み（2選択）　数字は%

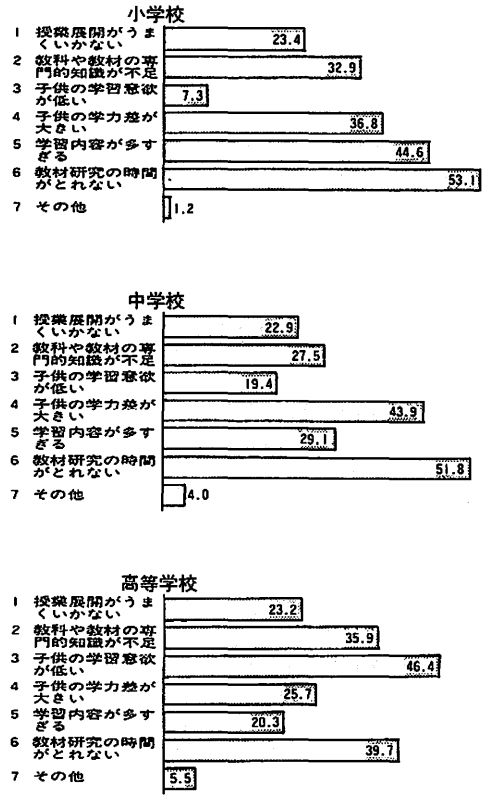
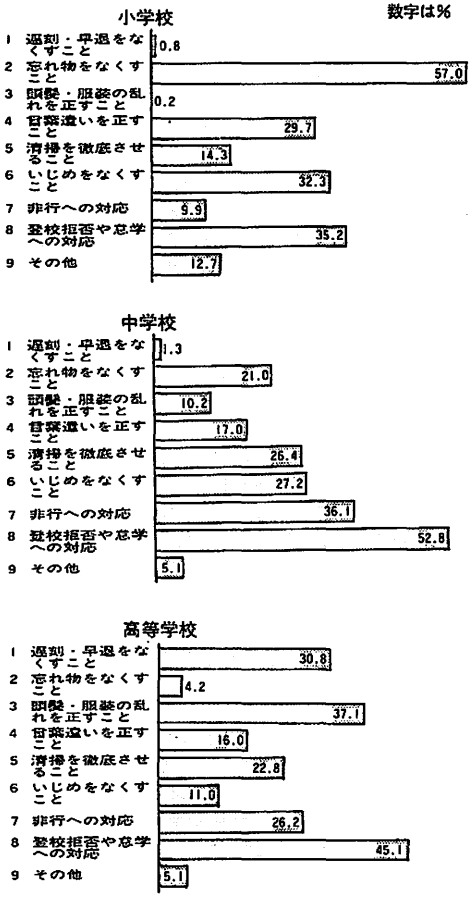


図5　生徒指導における困難なこと（2選択）

数字は%



等は多様化している。大学進学を目指して勉強していた高校時代の自分たちと比較したとき、現在指導している生徒たちとの間に大きなギャップを感じることも多いようである。」

さらに図4「学習指導における悩み」では、小学校教師は「教材研究の時間がとれない」→「学習内容が多すぎる」→「子供の学力差が大きい」の順で悩んでいる。中学教師の場合は二位と三位が入れ代わり、「子供の学力差」がより大きな悩みになってくる。それに対して、高校教師の一位は「子供の学習意欲が低い」である。

小学校教師の悩みは一、二位ともに教える側の問題、子供自身の問題である「学力差」は第三位である。だが中学ではそれが第二位になり、高校ではより進んで学力以前の「学習意欲」が教師の第一番目の悩みになる。「学習指導」における教師と子供のギャップは小→中→高と学年が進むにつれて広がり、特に中学と高校の差は大きい。

「生徒指導」ではどうか。図5をみると、小学校教師の場合は、日常的な学習指導と重なる「忘れ物」が生徒指導の悩みの第一位である。中学校では「登校拒否」が第一位になり、生徒の問題行動である「非行」が二番目の悩みになる。それが高校では、「登校拒否」に続いて「頭髪・服装の乱れ」と「遅刻・早退」という学校の日常の秩序を守らせること自体が生徒指導の課題になってくるようだ。

先に、子供たちの教師観が成長とともに変化すること、それも小→中→高と進むにつれてマイナスイメージが強くなることを指摘した。それと正比例するかのように、ここにあげた青年教師の調査結果は、教師の子供への評価もまた厳しく変化することを示している。あたかも小→中→高と、教師と子

供が競って、〝互いの間（あいだ）〟の距離を広げていっているかのようである。このような現代の子供と教師の関係をどう理解すればよいのか。

五　多様な子供の個性の狭間で

反抗期という言葉に代表されるように、子供は身近な大人との葛藤を通じて、一人の人間として成長する。その意味で、先生が嫌いと答える子供の割合が、小→中→高と増えること自体は、人間としての正常な発達を示す指標といえなくもない。

加えて現代社会の変化は激しい。もし、子供が時代とともに変化し、それが一人の人間として自立するために通らなければならない過程であるならば、問題は教師がこのような子供の変化を積極的にとらえ、どのように子供の要請に応えていくかであろう。

この点について、鈎治雄氏は先の論考で次のように述べている。

「このような子どもたちの教師に対する尊敬的感情が漸次変容し、中学校段階を境に、教師の権威の低下や批判的感情が増してくる背景には、自我意識の発達過程や独立心の発達の過程を無視することができない。……教師にとって重要なことは、こうした感情傾向を、思春期における自我の形成過程として正しく理解してかかる一方で、精神的にも不安定で判断力の欠けるこの時期の子どもたちが、教師の毅然たる指導を望み、模範的態度を求め、真の権威を憧憬しているということをしっかりと認識してかかることであろう。事実『先生は、子どものよき手本となってほしいと思うか』との設問に対しては、中三の八割、高三の七割強が『そう思う』と回答しているように、この時期の教師への期待感情には、きわめて高いものがある。」

だが、実際には、静岡県教育研修所教職研修部が指摘するように、「生徒たちの能力・適性、進路、興味・関心等の多様化」にとまどい、そのギャップを埋めるための方向と方法を見いだせずに悩んでいる、というのが、青年教師のみでなく、小・中を含めた多くの教師の実感ではないか。

しかし、それは子供自身の悩みでもないだろうか。一方で既成の権威の象徴として教師に反抗しながら、他方でより模範とすべき権威もまた教師に求めざるをえないという、アンビバレンツ（二律背反）な状況に、現代の子供たちは置かれているのではないか。

六　子供と教師の間（あいだ）の再構成を

問題は二つあると考える。

その一つは、子供の望む〝手本〟が多様にならざるをえないことである。子供たちはあくまで人間となるための手本を求めている。だが人間である以上、そのあり方は一人一人異なるはず。まして個性化が要求される現代である。加えて、少子化の進行により、多くの親は過保護とも思われる手間をかけて

子供を育てる。子供たちが要求する人間の手本は、子供の数だけあるといっても過言ではない。

それに対し、教師は従来の教師である限り、既存の教育内容と学校の規則に則って〝教える師〟を演じ続けるしかない。とすれば解決の方途は二つ。子供に手本を他の人に求めさせるか、教師自身が多様になるかである。

だが、現実に子供が自分の個性にあった〝よき手本〟を教師以外に見いだそうとしても、その機会を得ることはほとんど不可能に近いといわざるをえない。これが二つ目の問題である。

日本に生まれた子供の九割以上が高校に進学する時代とは、子供にとって学校が「行きたい所」から「行かなければならない所」に変化したことを意味する。もちろん大多数の子供は登校を拒否せずに学校へ毎日通っている。だがその多くは、目的を明確にもった学習者としてではなく、学校以外に自己の生きる世界を選択できない者として登校していないだろうか。

それに対し、教師の多くは「自ら進んで教わりに来るべき者」として子供を位置づけていないか。その結果、教師は子供の変化とそれに伴う問題を、子供自身や子供が生活する家庭や地域社会の問題としてとらえてこなかったか。登校拒否（不登校）の一般化は、このような学校と教師のあり方に疑問符を提起したといえる。

ただしそれはこれまでが誤っていたからではない。逆である。正しかった故に生じた子供とその生きる世界の変化に、旧来のままでは対処できなくなったということである。日本の教師はその優秀性故に自らが生み出した世界によって、そのあり方を変化させることを要請されていると考える。

そしてその変化への要請に応える教育行政や学校制度上の問題解決の方向はかなり明確になってきている。

子供一人一人の〝よさ〟を育み、〝関心、意欲、態度〟を重視する〝新しい学力観〟、〝楽しくなければ学校ではない〟をキーコンセプトに誕生した〝生活科〟、教師主導ではなく生徒の個性的・主体的学習を目指す中学校の〝選択履修幅の拡大〟、高校教育への〝総合制〟〝単位制〟の導入、学校の外の世界の豊かさを求めて出発した〝学校週五日制〟。いずれも子供とその生きる世界の変化を正面から受け止める改革への歩みと評価したい。

問題は教師一人一人がその意義を自覚し、自ら変わる痛みに耐えて、子供の変化に応ずることができるかどうかである。だがそれは、子供の多様な要請に無制限に応ずることではない。誰もが学校という世界を中心に一人の人間として成長・成熟せざるをえない社会に相応しい子供との関係をいかに創造するかである。〝教える師〟でありつつも、どれだけ〝先を生きる人〟として、多様な子供たちとの〝間（あいだ）〟の世界〟を日々つくり続けることができるかどうかである。

教育じほう
1993
NOVEMBER

目次

学校自慢・狛江市立狛江第四小学校
子供の詩・秋川市立草花小学校／田島稔之

四季散策

・モデルとの出会い …… 画　家／田村能里子 …… 4
・チャプリンと志村けん －TVは沈黙の豊かな情報性を取り戻せ－ …… 常磐大学教授／伊豫田康弘 …… 7
・私の仕事 …… 小児科医／吉岡　隆之 …… 11

この人に聞く「生きている喜び悲しみを伝えたい」 …… 俳　優／米倉斉加年 …… 15

特集　魅力ある教師

〈実態報告〉
今、子供にとって先生とは …… 静岡大学助教授／馬居　政幸 …… 20

〈手　記〉 1
子供にとって「魅力ある先生」とは …… 富田　恵／武内　夏子／斉藤真沙美／高橋　英樹 …… 28

〈手　記〉 2
あの時の授業、あの時の先生 …… 松村　潤子／石井由里子 …… 34

〈論　説〉 1
魅力ある教師像を探る …… 日本社会事業大学講師／石子　順 …… 38

〈意　見〉
教職の魅力とは …… 西ケ谷郁子／川嶋　環／大野　恵子／杉山　英昭／吉崎　武敏 …… 46

〈論　説〉 2
教師の力量と専門性－自信と緊張感を胸に－ …… 帝京大学教授／大石　勝男 …… 56

〈事例紹介〉
自ら学ぶ教師 …… 山中　義男／堀井　榮夫／青山　伸子／名取　守／清水　弘子／梅澤　秀監 …… 62

連載

学校経営講座「学校改善の支援態勢」 …… 東京学芸大学教授／児島　邦宏 …… 74

・私の実践・私の生き方 …… 「継続は力なり」 …… 増田　貞枝 …… 78
・新教育課程・実践相談 …… 「環境教育」 …… 榊原　篤彦 …… 82

海外あちらこちら
北京から見えたもの …… 池田　研次 …… 85

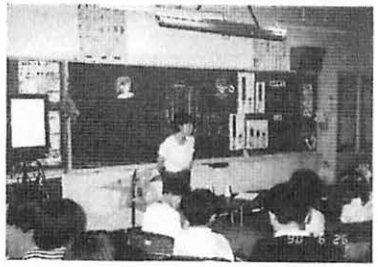
・私の自由時間 …… 「私の山登り」 …… 石橋　和子 …… 88

東から西から …… 町田市教育委員会 …… 90

春風・緑風 …… 「遊びの中から見えてくる」 …… 大久保泰斗 …… 92

・読者のひろば …… 94
・都研情報 …… 都立教育研究所調査普及部調査普及室 …… 95
・あとがき

扉〈切り絵〉余川隆正／表紙写真と文「私の東京町歩き」木戸征治



特集　魅力ある教師

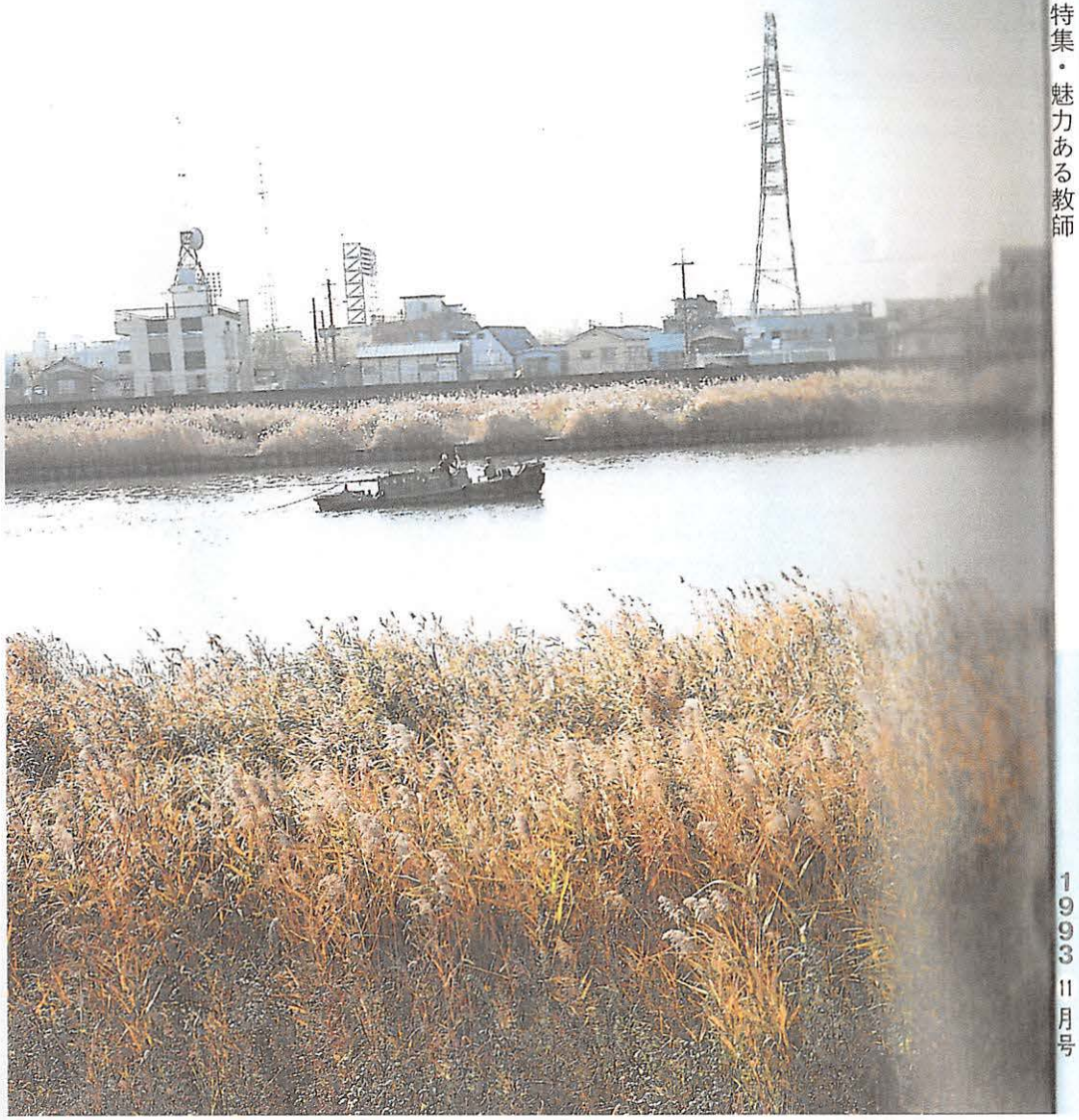
昭和41年8月20日第3種郵便物認可　通巻550号　平成5年11月10日発行（毎月1回10日発行）

教育じほう

11

1993
No.550

特集・魅力ある教師



教育じほう　No.550　特集・魅力ある教師　1993 11月号

昭和41年8月20日第3種郵便物認可　通巻550号　平成5年11月10日発行（毎月1回10日発行）

NOVEMBER 1993

教育じほう　編集　東京都立教育研究所

©1993 Printed in Japan